



燕石
十種

大畫舞考證

五輯

貳

45
679
45



大畫舞考証

凡例



○ 大畫舞ハ俳優ニ朱判者多ク作ル歌形者多ク小歌
 の如ク形ナリ一ニ徳半宮本をもて傳へたる者系徒然草也
 云々見んたり者多ク傳へる是れ終る録也

○ 本文はして七五位何々中以三行末十行若くは五行
 句も讀みおちて七五位何々も多し是れはふまに記さん

○ 昔系ふ古き少歌の形たるを已らふ此大に舞の形を
 おのたまふやうたるもの記し傳へたる三本あるは文句の法
 つきおぼたなるのみおのれ歌文をおぼふも多し今好
 りしより少法なき二三本を以て授合するは皆出たりづ異
 同たり是れをわらう雜

○ 文句の如く百餘句の昔を思ふべき事多しとん其

意解ありき事由りて今諸書を参考して事を記
 すも之を以て十の一二に詳記して其事多し後好事家の
 明証を待のこ
 ○本文二行の記す事考を二行の記す本文の傍に引
 何れ考べふき事の形

享和四年甲子孟春 山東京傳識

引用書目

上木時代の新古書と尊卑二拘り
引用の次序ありて記す

- 一 吉原をわりの歌惣まろり 寛文三年印本
- 一 吉原戀の道引 延宝六年印本 菱川師宣繪本
- 一 五元集
- 一 車跡合考 延享三年印本 柏崎永以源貞文著
- 一 阿川まわりの 寛永十九年印本 元吉示細見
- 一 長明無名抄 元禄二年印本
- 一 江戸名所をれ 元禄二年印本
- 一 卜養在歌集 延宝九年印本 菱川春画
- 一 好色吉原春駒 元禄六年印本
- 一 四場居百人一首 享保五年印本
- 一 異本洞房詔園 享保五年印本
- 一 朽葉集 一類柑子

- 一 異本吉原徒然草 三徳中写本 一 松の葉 元禄十六年印本
- 一 洞房詔園 元久三年板本
- 一 江戸真砂六十帖 寛延中写本
- 一 一枚摺吉原細見の繪圖 三徳中板本
- 一 江戸鹿子 貞享四年印本 一 江戸岡鑑 元禄二年板本
- 一 夢半鹿夜話 享保四年写本 小川破笠記
- 一 源氏物語 一 吉原大全 一 みまを伝
- 一 吉原法水草 元禄二年印本 一 油りす 松永貞徳著
- 一 吉原大黒舞 宝永六年板本
- 一 新むぎの曲 曙雨更名夕集宝暦三年板
- 一 役者職歌 享保三年評判記 一 同 十四年評判記

以上

通計三十一部

大盡舞考証

二 朱判吉兵衛作

無名子編撰

新吉原のたうらむを めく尻をかき水加筋 つるふ新所揚
屋敷陰橋の宝羅 ハッ橋立 出て下谷筋 東廊山
わさくら坊 金郭山 のせくら水ん坊 つるふ名 さき
くまの わさ 舞 の 坊 さ ま の 長 羽 扇 と 水 の 孔子 の 此
た ま つ く つ と セ ウ カ ル ラ ウ 我 を 念 は る 非 事 ハ ッ リ セ ウ 能
ら ウ 名 所 ハ ッ 新 や ハ 水 ん の お い カ リ ト ホ 乃 ト
ま ハ ク ツ ト セ ウ ヤ リ ヤ 子 ニ ナ

から尻

むらり 御堂市門のから尻馬の吉原へ通ひし事人の
知れりし事 寛文三年極本をやりし歌想もさうし
堅信月何れたの如し

○所より吉原迄堅信月事

一日本橋より大門まで 並らちん式百文

一 馬如二人土のりし 並らちん式百文

一 飯子見月より大門まで 並らちん式百文

一 定宝六年極本吉原迄の堅信月事

朝虎馬の目で行頭り 甚角

土年の馬くつんを 甚角

右の夕おの馬くつんを 甚角
舟くつりし事 甚角
新日産の者を馬くつんを 甚角

から駕

事路合考云 寛文より頃 山田強市を以て 諸人の金銀を
盗り奪り 刺入を 甚角

今モ小児ノ子習フ本ニ隅田
川往來トテアリ其文ニ田
中ノイナリニテ實ラ開キ
興ニ芝生ノ草ツキニ草
トル手モタユク足履レバ
時行カゴニノリニテアリ
三圍ヲ田中極荷ニカゴヲ
ハヤリカゴト云ルニ極ヨリ
正徳頃ノ古風ナリ

東嶽山 金龍山

東嶽山の少櫻 赤詳なり 寛文より頃 山田強市を以て 諸人の金銀を
盗り奪り 刺入を 甚角

細名死のさし 餘り 寛文より頃 山田強市を以て 諸人の金銀を
盗り奪り 刺入を 甚角

とらん坊主文の頃と
まんがとらん坊主文の頃と
者ト云フカクカニヤト
聞エドトハ後ニ出来テ
ニテソノ頃通人ナト云フ
ナシ元吉原ノハヤリ詞ニテ
早ク記リシト見ヘタリ

加賀屋浦里村部

加賀屋

二十人... 加賀屋を徳とて

右一枚摺吉原細見圖

上木年代不詳事... 細見ナリ

黒石所 別業

目算所 殿

一蝶 一蝶の傍也

民部 佛工あり

かくて... 師和意珠

おま... したる

按ニ目算... 知ラスコ

コニイ... カナ

小四部

村を流... 其の

善 六

若 多

清 多

嵐 代

日蓮宗 法名 田珠院 玉山 日登

善六部... ナレ

伊勢守御松平藤房寺
留守居ナリ

扱新五郎の娘ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
形を大和屋の居る小奴勝山身くらひたる志よてりものふ
る形若き新五郎の娘の形よりアお大を舞をんさいア
甚功のちを

伊勢守高徳寺
伊人おき詳後書を

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

高安彦太郎棟樂ナ
リ高安ノ考畧之

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

○約居主人ス戸津ノ典
兵工ハ侍馬町紙間屋ニ
テ有シテ放蕩ニテ家落
ニ付向、如ク人ニ随テ遊
ビアルケリ、四モヨリ至テ
音用ニテ諸ハ心付下
カ、リ能メテ北ニ大天
坐ニ入り地頭ヲトナリ
六十余ニテ死シタリト
云ク龍溪ノ説附録ニ
出タリ但シ指ヲ切タルハ
ハ名ハ何屋ノ大蔵カ、リ
イヘリ車ニミタルハ、前
屋ノ三笠ニテ馬屋ノ、勝
代カ、コト見ヘス大前ト
云ニハ勝代カ、コト認リシ
カ又ソレヨリ先ニ勝代
カ事ハ別ニアリシニヤ
一輝氏部等ト同時
ノ男ナリ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

扱新五郎ハ伊勢守高徳寺を去りて月おのれ
車跡所詳昔より伊勢守高徳寺を去りて月おのれ

○此下は上代考ふるべき事あり又内禮はたんとて言ふゆゑ
多岐を以て畧之

附録

二朱判吉兵衛傳

道藏の存人中村吉兵衛諱名を二朱判と云楊所は江戶御名
一其り云幫間ふ妙しを得たる者吉兵衛小男形れし世の
位上吉兵衛其比乾金の二朱判と云しとて位よき人形れ
形我らんと然つてひたすら明和三年八月廿日享年八十
余とて没す谷中日蓮宗常在寺に葬す

法名 深入院宗禪一甚日定

宝曆三年庚午の曉雨曉翁ト更名したる時の集舟形を
とてふりふ月忘りふ廿日を問んぬる者一甚
甚角「二年新やと云ふ人もや」男と云ふ句は老を
兼形と云ふ非と云ふ吉兵衛の朱判と云ふふらむを
たる句と時代を考ふる吉兵衛の初め句なり

○享保三年後者評判記 後者職歌

上上 牛村吉多壽 中村彦

門跡曰此人三年つせ人吉當由森田彦かほんせふひめつと出らぬ牛村彦
 九加うらひの奴母新うと何とら水くくくやれ新入然あ見てまのこく當
 自んせうしやや也我と命を命くくくやれ出りて形もれた語二千
 孫あうの新作ひやうくましくゆいんこもふふぞとを甚居又其命
 ころん市のせりふ大てゆいん今はさしををやうふはるをたて形もれた
 のもまはら

右評ふは三年功新う何をまて見れらと徳三年即之舞彦へ
 出らぬや然て室永五年牛村彦一富士新彦の愛我と不狂
 言の阿者やいつくや原古の後を新たる狂之徳彦をんれら
 右の評ふは三年功新う何をまて見れらと徳三年即之舞彦へ
 享保十四年

▲道外飛之部

上上吉 上 中村吉多壽 牛村彦

大日屋外の上吉多壽橋下には先せらるる詞をい願茶をまし
 拙人形やとと驚のつまめと當顔足せふ寒を自武を又と形くくく孫
 の娘のふきまんをえん梅若さ匂くまのふんやて今豆まや
 来ららめらるるあつてんぢんたらまをまきおをてくくすくまを
 とくおくおを形もれせらるる不おうくくおらるるくくまを
 とい何くたの神二多新きんぶのいや

大盡舞考記 終

雉子所齋藤氏藏書借寫
 于時天保十巳庚申月中旬

山東庵註

享保三年役者評判記役者職畧ヲ引テ

右評三年以前の事ハ初キ舞臺へ出テ也然キ宝永五年中
村屋一富キ禮拜曾我ト云狂言ハ何ヶ也ソレハ源六の役ヲ勤ト云
下男

是醒翁の誤りある十宝の事ニモ中村屋ハ以テ山嵐曾我ト曾我
十郎中村七ニ布田五郎中村半三於此奈中村傳九布田狂言中ニ七
所終ハ有キ事人目狂言ト思ハレキ事人目嵐曾我ニ布田八郎曾我七
の役古今大ありキ是江戸キテお七の狂言の起ルキ右ニ云一富キ
拜曾我ト云ハ享保五年ニ板坂の少將嵐曾我ニ布田あり是ハ二代目
ヨク大老拜出セキ是亦十宝永五ハ享保五迄十三年程キ透
セーシ

役者色系図ニ云正徳四年評判記

上品(上) 中村吉之助

森田屋

評判
色助の云

是人のも医学子志すは切者かるとりては人て存何たり
はた是の時をいひ存の二朱判者を測筋それ故等々測筋大
いふは森田回座が初より二部と頼政大極的うづつらの役二番目
初よりがりより出りて一と一と齒をむたけり長大小を能き一こ
しやつこ丹前よりいひては隠居が扱ひてありしものか者存二朱判
と云吳名故隠居小兵と思ひし一團庭庭あどと五格のせいふ云程子
あり叔修と頼政世口上只今迄の二朱と法秋のいふげて一あり大判
よりあされりこれのおとすりかると歌の初めを打れ遊口平右
衛門殿を舅と頼政と助方たつめ合大でけを法秋とて半居思
志るは然のほのみ多びさいとていふと悪人せとのせあり和の本ね
おけりの何々事系ひん上上の立役は隠居のうつり終つるを待たま
し一回書目録よ

▲系鬚奴立役之部

上上 富 一風替 富沢半三郎 山村

上上 考り物 大谷 廣次 中村

上馬 評判男 中村吉之助 森田

上 上 鎌倉半三郎 市村

如は何きハ正徳三年ニ初舞臺と云る事論ふ

右に小事故二朱ト吳名云る事一是といふ人云如は吳名ヤ一云ん
又奴丹前自振隠居と云る事一何きハ初傳九布と云る事一且ふ
り能うつヤ一故中村吉之助ト改名一舞臺へと勤ヤ一又當き初
殿ト云時つちハ此存一のト云ハ吳名ハ時のをハトあれハ梅三馬ト云る事
りヤヤ一と云る事

正徳五年顔見世評判記 二本アリ

役者懐世帯 八文字や板 役者 外題不知

上上 勘持座

去年年う回せよりつき出りて立役とらんや地より藝者といひみふ
り根が主人をれハ初見毎をりの花と云一と云りとい思ふことと云ふ
て其のある立役何と云か上久子と云る事西の宮のてこのおまハ

一 大当り控られぬ一 諸々物ごとく此稿この吉を聞よと今ふ此称美下也
震と山猫の異名いりり

後者評判一、富

享保十三歲申年二月
此評判記は江戸役者ナリ

せんも
とつや

あまごきとみつけま
いつとん四神

▲ せんさくくろくろ

▲ いりけきり

▲ ちぐちちかつり

あまごきとつり

半夜の立物
上上堂や



中村吉兵衛 市村彦

ちまごきやうひやし
ふんんんんん

いんまよふくすむにふせをん吉ひやう

あまごき

▲ ひのまるたまにあまごきこれぞんきよのみるい堂。まんざいんくのひやう
あまごき。こころのゆりせんでも。ちらぢてあまごき。いんまよふくすむにふせをん
でんすしをんをる。あまごきのひやう。あまごき。いんまよふくすむにふせをん
うれとふ。ちまごき

享保年間戲場画本 奴所作事の 苗左三馬



市川さん
うせとせ口上

中村吉兵衛
奴所作事
大あごり

舞臺を勤しむ正徳三年より寛保年中迄劇場を遊學し船
住居し吉原へ控室を伴ひた鼓持し々着業しし金銀衣類
ふと貫やといふ其身の貯り多ふく負しきものありかどこしお
夜半帯したる討子長命めて七午儀才を明和二年八月六日
終る戒名ハ前ニ禄を憐れ人君中村吉茂と云女形あり是ハ
父より先ニ死去ス戒名光岸院回玉元文四年四月廿四日谷中常存寺

元文四評判記

役者枕披記

上上吉

中村吉兵衛

河原崎屋

傾城蝦夷都

元文三十一月
木柵町貞之丞

似せ然西公布ト成梶原与舟慢頭の買ろんる首引

まうとの役さしして評ふし

同書女形ノ部

上上

中村吉蔵

日座

西つ登る丸やまうまの姿まてし経と足巾の装飾し

厚内源平いんさき及縁切一谷まて熊谷に討れぬうつく
しにお子ていおれ

同四年四月吉茂死去後し吉兵衛愁腸の余り戯坊を退
座し又昔の右鼓持となりしあうし舞臺勤行る廿五年
ト云し

その後寛延三年市村座

初曆書曾我ニ竹下孫八なる中村八十吉ト云アリ
紋丸ニ分洞ニ上ノ字を付る道外方ニ位上上是吉
兵衛中子なるやいな

右書より控寫し考証の道かとも

豊登芥子文庫ニ納

大書舞考餘

谿舎齋山人補

大書舞の唱哥ハ二朱判書を曲々作と云ハ誤之ヲれ今更ニ改ムト云の字
近代迄繪さじやめて書々紙之重なりて考付み紙繪と
七枚と板本ハ永代格北新堀ハ平高と記して誤脱の亦ハ
然と云板と云々

新吉原此字ハりさうにかくれハ之町揚屋何レ格不むハ格

かくれ駕

山東元々事跡合考ヲ引て云竟文の山田海市ト云悪人諸人
の金銀を借り奪り下界山田海市ハ糖本ハ諸人を借り
金銀をたるふらハ江戸六法の白栢紐有る有て天和元年
四尋者と云人相出るかくれハ之を元より江戸ハ糖本あり
元禄の末二丁立の子舟ハ糖本割カよりハ糖本と不物專
ら世々時花ハハ糖本付狩用ハ本名町駕籠古名かくれハ
今俗ハハ駕籠と云

浮をハ 小むら 八をハ

うきえり八橋にそりの名ハ元禄六年刊本松の葉に内若縁を衣春駒
あはれみ向ふりしむらまは

小櫻坊

元禄の比までなうといふは小さくら坊の事なり元禄の比の
板吉原大倉吉原中とを葉とふ名はまて田うといふ
事なりなうといふは捨字とてなをまてつとふ名はまて田うといふ
ひまを女所共笑てふを之にかくつれは小さくら坊といはるを後
ふまて坊といはるは尚代者の考証をやること

とうまん坊

松の葉に諸とふ小寺小寺とて道名のやがまけが駒とよめて
乃つとやまをりんがうあつたりやおそまをりたつておそ
のきいふあれんがたりりといひおりてよまをりるを新あつとよま
きをたつたりとよまをりたつておそまをりたつておそまをりたつて
こつりし坊といふは捨字とてなをまてつとふ名はまて田うといふ
まはは古言にて後ハ道者といふは後を道人といふはまをりたつて
とうまんの名をあれといふ文字のらの字は誤る事多しといふ坊はつと
をんの名を補ひはるなりんがうといふはまをりたつておそまをりたつて
好色吉原春駒とて鴛の初音といふ事なりんがうとておそまをりたつて
云い鴛と云る延宝九年八月松會開板大和寺祠大倉のらは引たつて
ふく寺といふことむ人をすまはつとくひまといふはつとくひまといふ
寺の初音のまをまてつとて寫す語の小寺は先ハ存所を尼出たりと

三浦のまてう

山東尾の説の如く紀文に根引せりといはる

奈良茂

靈岸島に位を奈良茂を記す材木の小揚人只といふ事
坊町相木果々字と減しを俄小を限者と改世を名とぬふ
鳴呼不入ふりふ三代ふしと家絶を戯坊を戯の意休とふを奈良
茂々父のふりまをいへるも改改寺を伴川 吳岸也
初代 奈良茂左の 刺替して法名冥休

- 二代目 茂左の 上方にて浮名をふりて言子にて早世
- 三代目 安左の 二男後に家督お継

享保世説享保十五年の條に十二月の魚のりといふ如左なり好いふ
る

黒江町目算印殿

拙、是は奥女申江島を引八見人といふは
や今にては陰日物を巧むると目算といふ

一蝶

此は乃ら流りせ一言年あらん
多分長湖と云ふ一諸を名女煙言に正徳年中の刻は質長崎かと
西り未社共が万能中道して住てたて改めればさりとてむつり
別は質長崎といふ云ふや百人の善婦を刊本は送りし一蝶
民部角てふ遠島

おやん

西船置の産元禄六年板橋町の入口の岸也小指腹をという方の
女房ハ分別のまんとしてを夫ハ板橋多野助よはきしき子の開山子
頼り時節何れハ我世とておろさぬといひる事多クのみあり云古元
禄板橋系大金やりての名京町三浦内まん云板橋は世子のまんよて
女老教坊也

善六

未詳此消字語訪町河岸小部管や善六と云者其に善
一件を不詳所

おめく

延宝九年印舟大和船初大金にそのおめきとをさりしれり
おめきとよ江戸にておりといふ此崎にては子ありと云板橋を
おらし和船よりおりといふ俗子ありぬる一ふといふ是を文化の
こけよりおりといふおりといふおりといふおりといふおりといふ
を浸る子を東國までおりといふおりといふおりといふおりといふ
を筆ふるおりといふおりの字ありおりといふおりの文句といふおり
ておりとておりといふおりといふおりといふおりといふおりといふ

おやん 呼子馬

百武亭云まんといふおりといふおりといふおりといふおりといふ
ており

西田屋又左衛門

天明の比家能多室とあるは又左衛門一子何り甲男
職とあり予らおらといふ唐いれ事り者もてお母ハ又
左衛門の下女を後中とあり一子を産み寛政年中松平伊豆守殿ハ
許江中此詮義の上お名亦一再興して西田屋又左衛門といふ祖母むと
りて考心おりといふおりといふおりといふおりといふおりといふ
其食しと産子世も是を西田屋の名跡失あり也代者系名其
おりといふおりといふおりといふおりといふおりといふおりといふ
村甚内といふお名甚内といふお名甚内といふお名甚内といふお名甚
甚内といふお名甚内といふお名甚内といふお名甚内といふお名甚
内といふお名甚内といふお名甚内といふお名甚内といふお名甚

新五左

按よ安永の比おと云て後武左といふ

大松屋勝山

本所尾に説大松也市市全圖がおらさんち也勝山といふ
此を考下云吉原をて奴と云一一生勤めする女市を云
とや信也不詳なり

指き屋

松葉羊をまふ一の浅黄帷子といふ切指切といふ
事なり

上、吉金

註同二朱判と異名を又劇場の年表を勘正二徳四年
刊本役者目録講 江戸を其礎撰評判記

立役之部

上

(上)

中村吉金 毒田彦

^{無一坊曰}此人は二朱判の吉金を演じて此歴のなかへおまへへおれ此酒宴の
きり者中村傳九がやつこ丹前をわ役者のちうをうり一年に度な
藝をいへまこれ本がこいおれいはなが娘ありわうしあひる伝を
そりたるな指するをは人おれれはれて風流るり母ものこ當新足世
長谷部付つらかきやつこあきまを好まけもまて中村傳九が
りり出でけけりま(おけ)おのちを藝をせんが新書へ出
たるかおいとがくやへりてきをいんせりてを小説の役者はといふ
めるまふらふりしせいとてそまやしお作しるが藝は近こ後何ぢ
をいさるる扱口上は私義に二朱者を演じりまよものけう(う)まきまは
めも又六大利は皆そのひききにあせられて下りやせと作らるるが
藝の角これくらぬよ何るいびりありの大少ありままらるる思

中村傳九新書論あきら

享保三年役者三幅對

ハ文字や板

評判記

上上

中村吉金

中村彦

^{香徳}當新にそ神木によき木千本殿下人せり中畧由きへ又五尺殿(水く
ていさうひ武集判吉金)めといこれ後まふ下思

享保六年役者若咲酒

上上

中村吉金

中村彦

^{狂遊}吉金(海)殿いふふ一源次を演じて或や(こ)丹前傳九殿風しのみ今武集ハ
き、おせぬまきと思ひ下されハ尤幸り

享保十一年役者正月調

上上

中村吉金

中村彦

^{評者}藥も伝の中藥斗で多く入るハまごがぬるしといは人おせりとい何
藝も不足なくいこれぬとい云のあい間用人おれ共大考りあり云
享保十七年役者春子満

外に部

上上品

中村吉之助 市村屋

〔注〕廿年以前己の正月に本村田産初て出らきて時より二年判と諸足物の
の由稱善持れより打つて及び休ししあし由勤は友親足世に山申度しゆ
あふりれを文本の以息とまけ子息を為居よるお知り而作をせらるる
迄まで由後ふし追年道外方の藝斗りあきりるあ及分の部へ入りた
は外享保二年同五年同八年同十二年同十八年同二十一年等の評判
記にいさしたる事ふりれに贅せん

古式亭の曰吉之助舞臺を志りてきて後具原の人より由徳以右鼓持と成り
ふりしと二年判と呼そ此何少吉之助二年判吉之助何きし名字し
後ふりし事ふりし舟町小住を考く由後前の金持の家へ出入判及しと終
りて何なりめてし終りしと考や

因云あふ吉之助りるハ松の葉何ぞとらとふあふりむとりとせれとつし何
ふむこをけりて云く何り只吉之助と斗りあはれ人

正徳四年役者色系團小主人より医学子ふこころせしは保吉之助なりと由按
み是藪管しるる陰語もや享保十二年役者正月朔薬のまゝへ同十二年役者神香
焼みつては氣の葉あはれ狂言のまゝに能ふさるしとてしり吉之助元は医師
ても何なりあらん能舞臺勤るる二十五年中何りげ出初り同三十年正徳三年
より寛保二年迄

因云中村ハ吉ハ吉之助と末葉まで分舞妓のふり付の役の始あり延享二
年市村府新に也入替り番付ふりてしり

○追考

末之段

イヨライ ありやう尾小むらきとれりやま玉川さけのくんをつとま
い志、あさんまんとまをまんとしと今まんとま今まんとま
志つちよめりちよめイヨライせんせこれのあアさやのせんささこやの
やんせうらちりしあアきおひまきあやうつておけちやや志つちよ
ん志つちよんらんらんといふ福もよしうちあさあころ即代が
めであ

高尾 三浦や急代の遊君世々知きり

小波 四

元禄のまゝを内々小波も又享保より此大津や内々小波あり

勝山 山有るの名君又大松や内散茶存山

古式亭曰勝山は古細足丸ういん色三味線等を合按る中果さんち
やうらやまといひる云くしりきり未詳

玉川

未詳事跡述テ考ヘ

白糸

享保六年浅草千本松ニ江戸町二丁目大松や内松といふ
新町加茂や内白糸享保五年丸鑑ニ山口や内白糸と何色

亦文句の内をとりてちううの此まひりては里まうくれあまゝ意ち川ともふまる
ハ云ハ元禄十四年板吉原石老門ニ京町一丁目せう屋甚存の内
あぢがいとあるハ此遊女ふまゝと

紀伊國屋文左衛門

中村木四郎道三或年江ノ島の石垣を建立して名を
残セしとあり享保の中より抄出

此書ハ二朱判吉多助ハ作ハ非モ板本の大冬并の初丁ニ凶吉述と云
按ハ只吉多助ハ小哥の上をとり酒宴の席ふと踊りつ唱しつ舞うが
し男藝者多しハ唱哥ハ元文中の作と云り元禄正徳ハ作
し物ふまゝハ紀文左良茂が事ハあらハ一ころ多ク琴道舎
ハ抄録し予ハ贈らねハ紀文が作のよし未詳

寛保二年役者村達

道外ニ部

上

(上)

中村八十吉

市村座

上

(上)

中村糸吉

川島崎座

寛保三年役者和歌水ハ糸吉と云○追加吉多助ハ出部
名二十七年あり



